

あとがき Postscript

下地秀樹

SHIMOJI, Hideki

本誌は、総合人間学会のオンラインジャーナル『総合人間学研究』第12号である。『総合人間学』（書籍）とは別にオンラインジャーナルの刊行（公開）をはじめて6年度目、誌名を『総合人間学研究』にあらためて2年度目を迎えている。

この数年、投稿論考は減少傾向にあったが、今号にはエッセイ一本、論文四本を掲載することができた。投稿規程を若干見直したこともあり、比較的年長世代の会員の投稿を得られた。

ご覧のように、自然界における人間存在の位置、他の生き物（植物）から見た人間（世界）との関係性、環境破壊にまで至る人間の制度（社会）優先という在り様、近代の黎明期に世界平和を構想させた人間理解（コメニウス）、現代の法と政治と社会の関係論における自然法的思惟の意味論的言語行為遂行論的転回（ハーバーマス）、といった論点をめぐる諸論稿が並び、総合人間学の課題が多様な視点を要し奥深いものであること、しかし同時に多彩なアプローチが可能なることを窺わせてくれている。会員諸氏には、著者たちとともにぜひ個性的な議論を拡げていってもらいたい。

なお、学会創設の頃からのベテラン会員を中心に依頼して、毎号掲載を継続してきた「総合人間学の課題と方法」に関する論稿については、今号は準備が整わなかった。ただ、この依頼を検討していた古沢会員からはその前に投稿があり、予定してのことではないが、この企画テーマに相応しいものと考えている。もちろんこの企画は、次号以降また継続していく予定である。

投稿の他には、学会内の諸企画をもとにした論考として、数年間継続している若手シンポジウムの諸報告と、初めて学会誌（書籍）の合評会での講評者から寄せられた講評の概要を掲載した。

2017年度の第12回研究大会の若手シンポジウムでは「語られない〈身体〉—産む・産まない／産める・産めないを巡る自己決定の所在から」と題し、社会的に語られない当事者の〈身体〉の問題に迫るべく、出産に焦点を絞り活発な議論がなされた。具体的には、現代日本の優生思想を抉り出す試みや、近代医療の普及が遅れた地域での実態調査に即し出産の自律性が損なわれていく過程を炙り出す試みが刺激的に展開されている。

学会誌（書籍）『総合人間学 第11号 人間にとって学び・教育とはなにか—未曾有の教育危機に直面して』の合評会は、2017年9月16日（土）に行われた。講評者は本誌に論考を寄せた須藤茉衣子会員と太田明会員で、須藤会員の論考にあるように、須藤会員が主に同書の第一部と第三部を取り上げ、太田会員は第二部を中心に哲学・倫理学の視座から興味深い論点を提起していた。ただ、太田会員は実はもともと予定されていた講評者の代役を急遽果たしたという事情もあり、本誌への寄稿は準備が整わず、またの機会ということになった。

さて、このオンラインジャーナルの刊行にあたっては、過去3年（度）間、毎号何らかの変更を試みてきた。

まず、第10号は書籍『総合人間学』と同様に学会の研究大会よりも前の刊行とし、研究大会から次の研究大会を刊行サイクルとすることを旨とするようにした。それ以前も、これは一つのサイクルとして考えられてはいたが、オンラインジャーナルに書籍とほぼ同じ内容を第1部として掲載していたため、どうしても書籍よりか

なり遅らせての刊行となっていた。これでは、個人研究や若手シンポジウムなどの研究大会での発表をもとにした論稿が、発表から一年半近く経過してからの刊行とならざるを得ない。これを一年以内とするようにあらためたので、初年度である第10号の編集過程にはいくらかの混乱が生じてしまった。

次に、学会創立10周年を区切りとして、書籍とオンラインジャーナルの編集を区別し、書籍とほぼ同内容のオンラインジャーナル第1部は刊行しないことにした。そのかわり、電子媒体としての特性を生かし、書籍のベースとなる大会メインシンポジウム以外の本学会の諸企画をいくらかでも速報する試みとして、年複数回の刊行を旨とすこととし、昨年1月末には最初の別冊として第11号第1部を、5月末には同第2部を刊行した。前者には第11回研究大会の企画「学会10周年記念フォーラム：この10年の試みから総合人間学における〈総合〉を問う」の諸報告と、「若手シンポジウム：〈病〉から考える社会と人間」の諸報告を収め、後者はほぼ従来のオンラインジャーナル第2部の構成を踏襲し、投稿論文などを収録した。その「あとがき」にも記したように、「記念フォーラム」の延長戦となる研究会には前者（第11号第1部）の諸報告を読んだ上で参加した会員があったので、年複数回刊行の意義はあったと思われる。

そして今年度は、以上のように考えながらも、また年複数回の刊行には至らず、この第12号一回の刊行にとどめることになった。先の「あとがき」には、「編集委員会としては、今後も本学会の諸企画からの情報発信を重ね、会員間の継続的な研究交流に資するよう、可能な限り年複数回刊行を試みたいと考えている」と記したが、2年度目にしてこの予告を果たすことができなかった。

例えば、学会の諸企画のうちでも、とくに研究大会については、上記の通り、第11号にフォーラム（この10年の試みから総合人間学における〈総合〉を問う）の諸報告を掲載したこともあり、第12号にも第12回研究大会のフォーラム（憲法と教育—9条の理解を深めるために）の報告をせめても掲載したいと検討したが、残念ながら実現には至らなかった。充実した企画ながら討論の時間が不足したとの感想を寄せる会員もあったので、また何らかの記録の機会を検討したいと考えている。

このように、編集に与った編集委員会副委員長（下地）の力不足により実現に至らず、中途半端に残ってしまった論考が複数あり、学会の諸企画から会員諸氏にあらためて発信するという予告を果たせず、この3年間、毎号刊行形式が異なるという結果になってしまった。責任を痛感している。会員諸氏にお詫びしたい。

さらに、これも毎年度続けている図書紹介（会員による新刊著書）のコーナーで、本来ならば昨年度の新刊著書として第11号に掲載しなければならなかった投稿を見落とすという、あってはならないミスをしてしまった。岡部光明会員の『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして—』（日本評論社、2017年2月10日）である。一年遅れで今号に掲載することになったが、取り返しのつかないミスであり、岡部会員には、この場を借りてあらためてお詫びしたい。申しわけございませんでした。

今号の一目瞭然の変更点として、二段組みを廃止したことがある。従来、電子媒体であっても編集側としては学会誌としてなじみのある体裁を採用してきたが、肝心の読者からは二段組みでない方が読みやすいのではないかとの意見が寄せられたので、運営委員会での意見交換を経てご覧の通りに変更することにした。

最後に、失敗を重ねるなかでも、本学会幹事（編集担当）の鈴木朋子会員にはよくご助力をいただいた。また、英文タイトルについては、バージェス氏（Burgess, Christopher James）にチェックしていただいた。おかげで、何とか形にするところまで漕ぎ着けることができた。ここに記して、心からの感謝の意を表したい。

[しもじひでき／立教大学／教育学]